

東北アジア学術交流懇話会ニュースレター

うしとら

第13号

● 目次 ●

論 点：セミナー「国際協力と産業開発を考える集いー日本と国際社会の健全な発展のためにー」	1
萬華鏡：「ロシアの鉱物資源（特に非鉄金属）」	2.3
Area Report [SIGNAL]：「朝鮮地域」「モンゴル」「中国」	4
日本館だより	5
講演会「朝鮮革命論の功罪ー自主から“主体”そして対話不能へ（北朝鮮の50年）ー」について	6
客員教授紹介	6
最近の共同研究会・講演会から	7
センター動向	7
「東北アジア学術交流懇話会」ー会員の広場ー	8



セミナー「国際協力と産業開発を考える集いー日本と国際社会の健全な発展のためにー」

東北アジア学術交流懇話会 理事長（東北アジア研究センター長） 山田 勝芳

本センターは、この2年の間に国際協力事業団JICA東北支部と、モンゴル(2000年度)・中国(2001年度)に関するセミナーを共催し、また昨年9月には同支部と外務省共催による「ODAタウンミーティング」を後援してきました。

標題の「集い」は、2002年3月18日に本センターと同支部及び国際協力銀行JBICの3者の共催、東北経済連合会・国際開発ジャーナル社の後援で、仙台情報・産業プラザ（ネ！ットU：アエル6階）で開催されました。全世界との共生を不可欠とする日本にとって、諸外国との良好な国際関係を構築することは極めて重要です。そのためにはODA（政府開発援助）を中心とする援助・協力について国民各層が考え、相手国にも日本にも有意義なものとする必要があります。そこで、ODAの実施機関であるJBICとJICAの活動を地域の人々に広く理解してもらい、またODAと地域の企業がどのように関りうるかを考える会としました。

当日の講師は、大堀英俊東北経済連事務局長、中島行男JICA鉱工業開発協力部長、松澤猛男JBICプロジェクト開発部次長及び山田で、司会は日本鉄鋼連盟で活躍された戸田弘元東北大学客員教授です。山田は「地域と大学の関係」と題して、東北アジア地域への日本社会の関心拡大を図ることも本センターのミッションの一つという立場で、本センターの東北・仙台地域への関わりを話しました。その際、寄附研究部門の活動、本懇話会を通じた活動とともに、広



い分野の国際交流の積み重ねの上に開設されたみちのく銀行（モスクワ）が、ロシアへの輸出取引における信用状発行銀行として認められたことも参考例として紹介させていただきました。

東北・仙台地域の企業関係者や国際交流を推進しておられる方々に、JICAやJBICのスキームを利用して企業活動や交流活動を行う可能性について考えていただいたことに、この「集い」の大きな意義があったといえます。約100人の参加があり、アンケートによれば好評であり、継続的開催についての多くの要望がありました。



ロシアの鉱物資源（特に非鉄金属）

東北アジア研究センター 助教授 北風 嵐

東北アジア研究センター 客員教授 V. M. オクルギン
(ロシア科学アカデミー・極東支部・火山学研究所)

1. 概要

ロシアは世界的に見て鉱物資源生産大国で、旧ソ連崩壊（1991）後、経済の混乱に伴い、鉱物資源の生産高も低下していた。しかし、1995年以降全般にそれも次第に増加に転じ、現在では生産高が前年度比10%も増加している鉱物資源もある。

非鉄金属鉱物資源の埋蔵量はその広大な国土を背景に非常に大きく、とくにシベリア・ノリリスク鉱山を主体とする、ニッケルの生産は世界第1位、水銀鉱石生産高も世界第1位である。また、白金族金属（以下PGMと略す：白金、パラジウム、ロジウムなど）、バナジウム及びタングステンが世界第2位の生産高である。金、モリブデン、アンチモン、インジウム、クロム及びマグネシウム等の非鉄金属の賦存量、生産量も大きく、いずれも世界の5位以内のランクに入っている。このほか銅、鉛、亜鉛、錫、コバルト、テルルなど多くの非鉄金属、鉄鉱石、ダイヤモンド、雲母、磷酸鉱石などの鉱物資源も豊富であり、世界屈指の鉱物資源生産国である。石油・天然ガス（西シベリア及び沿海州）及び石炭（東シベリア及び西シベリア）などのエネルギー資源の埋蔵量も豊富で、現在盛んに生産されている。

2. 非鉄金属鉱物資源

非鉄金属資源生産の最も重要な地域としてシベリア・ノリリスク地域（PGM、ニッケル、コバルト、銅）が挙げられ、このほか、東シベリア地方（コバルト、銅、鉛、ニッケル、タングステン及び亜鉛）、コラ半島地域（コバルト、銅、ニッケル、希土類金属及びタングステン）、北コーカサス地方（銅、鉛、モリブデン、タングステン及び亜鉛）、ロシアの極東地方（金、鉛、銀、錫、タングステン及び亜鉛）及びウラル地方（バナジウム、ボーキサイト、コバルト、銅、鉛、ニッケル及び亜鉛）などから重要な非鉄金属鉱物資源が生産されている。次頁の地図に上記の主な非鉄金属資源及びダイヤモンドの鉱山の位置を示している。

以下主な非鉄金属の鉱物資源の生産地について簡単に紹介する。これらの非金属資源を採掘している鉱山は多数あるが、このうち最大のものがノリリスク鉱山地区で、多数の鉱山が盛んに坑道採掘あるいは露天掘で稼働されている（写真1）。

銅：ロシアは世界の約10%の銅埋蔵量を有している。その大半は銅-ニッケル硫化鉱物鉱床及び含銅黄鉄鉱床である。その埋蔵量の約70%が東シベリア、20%がウラル地域、10%が北コーカサス地域に賦存している。現在銅鉱石として年間52万トンの銅鉱石が採掘されて

おり、その65～70%が銅-ニッケル硫化鉱物鉱床から、残りが含銅黄鉄鉱鉱床から産する。銅採掘量の約70%は東シベリア・ノ



写真1 東シベリア・ノリリスク地区の銅・ニッケル・PGM鉱山の露天掘

リリスク鉱山地区の鉱山で、残りがウラル地域の鉱山である。ノリリスク鉱山地区の生産量の70%がオクチャブリスキー鉱山（地下での坑道採掘）で、残りがコムソモリスキー鉱山及びタイミルスキー鉱山から坑道採掘されている。

金：ロシアの金の埋蔵量は南アフリカ及びアメリカ合衆国について第3位に位置する。金生産量の大半はロシア東部の砂金鉱床からであるが、近年、多くの鉱脈鉱床が発見され、その量は増加しつつある。現在ロシアの総埋蔵量（3.5千トン）の65%が東シベリア及び極東の金鉱床に埋蔵されている。主砂金鉱床はアムール、チタ、チュコトカ、イルクーツク、ハバロフスク、マガダン及びサハ-ヤクーチア地域にある。また含金鉱脈鉱床はロシア東部のチタ、チュコトカ、イルクーツク、カムチャッカ及びマガダン地域、東シベリアのクラノヤルスク及びウラル地域のエカテリンブルグに位置している。これらの諸鉱床からロシア全体で年間129トンの金が生産されている。

ニッケル：ロシアのニッケル埋蔵量は世界全体（1.5億トン）の36%を占めている。その78%が東シベリア・ノリリスク地区の銅-ニッケル硫化鉱物鉱床のもので、残りはコラ半島の硫化物鉱床及びウラルの風化残留鉱床である。現在、年間約26万トンの鉱石が採掘され、その85%がノリリスク地区の硫化鉱物鉱床からの鉱石であり、残りがコラ半島の硫化鉱物鉱床、南ウラルの鉱床（2万トン）からのものである。ノリリスク鉱山地区の生産量の55%がオクチャブリスキー鉱山（坑道採掘）から、残りがコムソモリスキー鉱山（25%）及びタイミルスキー鉱山（15%）から採掘されている。現在、この地区でスカリストゥイ及びグルボキー両鉱山が開発されており、年間20万トンの生産が見込まれている。

白金族金属（PGM）：ロシアのPGM埋蔵量は世界の埋蔵量の40%を占める。そのほとんどはノリリスク地

区の銅-ニッケル硫化鉱物鉱床産鉱石中のもので、少量漂砂鉱床からのものもある。現在、ロシアのPGM生産量は南アフリカに次いで第2位の大きな位置にある。ロシアの鉱石中PGMの白金に対するパラジウムの比率は南アフリカ産鉱石に比し高く、パラジウムの生産量も多い。ロシアのPGM総生産量(126トン)の95%がノリリスク地区の硫化鉱物鉱床から生産され、11トンのPGMが漂砂鉱床から産出している。ノリリスク地区においてオクチャプリスキー鉱山がPGM生産量の60%を占め、コムソモリスキー鉱山が15%、タイミルスキー鉱山が10%、ザポリャルヌイ鉱山が7%のPGMを生産している。これらの鉱床でPGMは鉱石中に副成分として含まれ、ニッケルに富む鉱石中に9.8g/t、銅に富む鉱石中に10.8g/t含まれている。また、ノリリスク地区のメドベジー・ルチェイ及びザポリャルヌイ両鉱山で銅・ニッケル品位の低い鉱染状鉱石中に9g/tのPGMが含まれており、これも露天掘で採掘されている。最近スカリストゥイ及びグルボキ両鉱山が開発されてきており、将来、銅-ニッケルの生産量が多くなればそれにしたがってPGM生産量も高くなってくる。

その他の金属：上記の他、各種の金属鉱床からアルミニウム、ビスマス、カドミウム、コバルト、鉛、亜鉛、水銀、モリブデン、銀、錫、タングステン、バナジウム、ウランウムなどの非鉄金属が産出するが、紙面の関係上

ロシアの鉱物資源生産量

金属		1995	1996	1997	1998	1999
アルミニウム	ボーキサイト	2,300,000	2,105,000	2,400,000	2,465,000	2,657,000
	地金	2,724,378	2,874,236	2,906,020	3,004,728	3,446,000
アンチモン	鉱石	4,000	5,000	3,000	1,950	1,950
	地金	50	50	50	35	50
ビスマス	鉱石	50	50	50	35	50
	地金	50	50	50	35	50
カドミウム	鉱石	725	760	790	800	900
	地金	725	760	790	800	900
クロム	鉱石	151,400	96,700	150,000	130,000	100,000
	地金	3,500	3,300	3,300	3,200	3,300
コバルト	鉱石	4,450	4,200	4,100	3,500	3,600
	地金	4,450	4,200	4,100	3,500	3,600
銅	鉱石	525,000	523,000	505,000	500,000	530,000
	地金	560,000	600,000	600,000	600,000	699,000
金	鉱石	132	123	124	115	126
	地金	132	123	124	115	126
鉛	鉱石	23,000	23,000	16,000	13,000	13,000
	地金	23,000	23,000	16,000	13,000	13,000
マンガン	鉱石	—	10,000	21,000	21,000	22,000
	地金	—	10,000	21,000	21,000	22,000
水銀	鉱石	50	50	50	50	50
	地金	50	50	50	50	50
モリブデン	鉱石	3,000	2,000	2,000	2,000	2,400
	地金	3,000	2,000	2,000	2,000	2,400
ニッケル	鉱石	251,000	230,000	260,000	250,000	260,000
	地金	201,100	190,000	230,000	227,000	238,000
白金族金属	地金	121	119	119	119	126
	地金	121	119	119	119	126
銀	鉱石	600	400	400	350	375
	地金	600	400	400	350	375
錫	鉱石	9,000	8,000	7,500	4,300	4,500
	地金	4,500	3,700	3,700	2,800	2,550
チタン	スポンジ	14,000	20,000	21,000	2,200	2,400
	地金	14,000	20,000	21,000	2,200	2,400
タングステン	鉱石	5,400	3,000	3,000	3,000	3,500
	地金	5,400	3,000	3,000	3,000	3,500
バナジウム	鉱石	11,000	11,000	9,000	9,000	9,000
	地金	11,000	11,000	9,000	9,000	9,000
亜鉛	鉱石	131,000	126,000	121,000	115,000	132,000
	地金	166,000	172,000	189,000	192,000	225,000
ウランウム	鉱石	2,250	2,000	2,000	2,000	1,750
	地金	2,250	2,000	2,000	2,000	1,750
ダイヤモンド	宝石用	1,050	10,800	1,120	1,150	1,150
	工業用	1,050	1,050	1,120	1,150	1,150

単位：ダイヤモンドは万カラット、その他はトン



ロシアの金属鉱床の分布

ここでは紹介出来ない。その産出量の推移を上記した金属とともに表に示している。

3. ロシアから日本への主な輸入鉱石等

ロシアから我が国への主要輸入金属及び鉱石はタングステン精鉱で、外国からの輸入量の約85%にも達し、その比率が最も高い。次いで二次製品のPGM及びチタン地金(約35%)で、ニッケル地金及びアルミニウム地金(15%前後)もその輸入比率が比較的高い。この他、鉛精鉱及び、亜鉛精鉱などの鉱物資源及び亜鉛地金、コバルト地金、クロム地金など多岐にわたる鉱産物が輸入されている。

4. 今後の展望

ロシアはその国土が広大で、気象、交通、森林などの関係でまだまだ未調査の地域が多く、また未開発の鉱床も残され将来上に記した非鉄金属類の埋蔵量や生産量も増加するものと考えられる。しかし、鉱床の開発は環境破壊を起こす原因の一つであり、これを考慮していかなければならない。また、鉱石の選鉱・金属の精錬に伴い、河川の汚水、大気汚染などの環境汚染に配慮した処理を行っていく必要がある。この点、現在ロシアで操業している鉱山はこれらの汚染防止処理を行っていない状態である。とくに、ロシア最大の鉱山ノリリスクの精錬所では未処理の亜硫酸ガスが放出され(写真2)、大気汚染が著しく、周囲の森林破壊が大きな環境問題となっている。



写真2 ノリリスクの精錬所に見られる大気汚染

AREA REPORT

SIGNAL

朝鮮地域から 加速する公害ボーダーレス化

朝鮮半島への黄砂飛来は恒例の自然現象で、すでに5世紀には記録が見え、特殊なことではない。数年前までソウルの黄砂現象はひと春に数日であった。しかし今年はすでに30日を超えているという。明らかに異常であり、自然現象を越えた「人災」の側面を強く呈してきている。中国大陸では、有蹄畜放牧による牧草枯渇で露出地表が拡がり、あるいは樹木の伐採が進むなどで黄砂が舞い上がる地域が広域化しているといわれ、政府では強く「退耕還林」政策を推進し、農耕地化をくい止め、植林運動を展開している。これによって、河川天井化を防ぐと同時に砂塵の遊昇を抑えることが出来る。

また、食料の不足する北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）では、山地や丘陵のかなり急峻な勾配地までも耕作し、地表が露出し、明らかに降雨によって表土が洗い流されている。豆満江左岸が森

林地帯であるのにくらべ、丘陵地形の右岸すなわち北朝鮮側ではこれが明確に視認できる（写真参照）。当然、豆満江の天井化は進み、この河川を共有する中国とて無関心ではいられまい。

（成澤 勝）



豆満江（見えないが急斜面の丘の直下を流れる）の右岸（北朝鮮側）はかなり急勾配の土地も耕作され、表土が露出している。手前の平坦な土地は中国側

モンゴルから 日モン国交樹立 30 周年

1972年、モンゴル人民共和国との間に国交が樹立され、翌年には相互に大使館が開設されている。社会主義時代のモンゴルとは、1977年に「ゴビ」カシミア工場が日本の援助で建設されたり、留学生や語学教師の交換が行われるなど、細々と交流が積み重ねられた

が、モンゴルで民主改革が本格化した1990年以後、両国の関係は急速に改善され、過去10年間にモンゴル国から大統領2人、国会議長4人、首相6人、外相5人をはじめとする多数の政府要人が訪日している。また日本か



日本の援助により運行されているバス（ウランバートル市内）

らは首相2人、外相2人のほか、国会議長や議員団がモンゴルを訪れている。モンゴル支援国会合議長国日本はモンゴルにとって最大の援助国であり、同国が受け取る外国からの援助総額の三分の一は日本からのもので、現在までに約1千億円に上っている。モンゴルからの留学生は300人以上に達しており、民間の親善団体は日本側に70団体、モンゴル側には30団体が活動している。日本からモンゴルを訪れる観光客は年間1万2千人にのぼり、従来の関西空港に続いて本年四月からは成田空港からも直行便が就航している。また6月にはモンゴル国立大学構内に建設された日本モンゴル人材協力センターが開館する。国交樹立30周年を迎える今年は、6～7月に日本文化の日と銘うった記念行事も計画されているとのことである。これといった反日感情をもたないモンゴルは、少なくとも国民感情の上では日本にとって最も親密な国の一つといえよう。ちなみに東北大学では、本センターが中心となってモンゴル科学アカデミー及びモンゴル科学技術大学と大学間学術交流協定を締結しており、既に研究・教育交流が開始されている。（アルタンザヤ）

中国から 進むデジタル図書館の構築

最近、中国文化部は中国最大の図書館である国家図書館（旧称北京図書館）の第二期工事計画と併せ、約10億円の予算を投じて国家デジタル図書館のインフラ整備を行うと公表した。今回の計画は、清末以来の歴史を持つこの図書館が1987年に北京市北西部に位置する現在地に移転して以来、初めての大規模拡張工事となる。この計画では書庫増築により蔵書能力を現在の1.6倍に高める一方、デジタル図書館ではまず図書情報のデジタル化と管理・閲覧用のソフト開発を軸に、関係組織を立ち上げてインフラ整備と人材養成を進める。このデジタル図書館プロジェクトは国家第十期五カ年計画の一つとして強力に推進されている。その背景として、中国語デジタルコンテンツの充実によりデジタル時代における中国語の重要度を高めると共に、蔵書の重複など無駄の多い中国の図書館環境を、電算処理技術の導入により劇的に改善するという中国政府の思惑が存在する。すでに各大学図書館や省レベル図書館では図書データの電子化が進行している。また出版界においても電算出版や古典のCD-ROM化など、出版物の電子化が急速に進んでいる。さらにインターネット上では政府の支援の下、

これらとリンクしたバーチャル図書館も出現している。むろんこうしたサービスを中国の一般市民が享受するにはコンピュータのさらなる普及を待たねばならず、また著作権の保護や海賊版の防止など法的・技術



バーチャル図書館閲覧用のプリペイドカードとCD-ROM化された文学全集

的に解決すべき問題も多い。しかし、中国語文献データが電子化されてネット経由で検索・閲覧できるようになることは、日本の中国研究においても少なからず影響を与えるものであり、今後の動向が注目される。

（上野松弘）

日本館 便り

nihonkan-dayori

本年2月12日、13日の二日間、東北アジア研究センターとロシア科学アカデミーシベリア支部歴史研究所の共催により、『スターリンの政策におけるウラルとシベリア』というテーマのもと歴史研究者によるシンポジウムが、当センターの連絡事務所の所在地であるロシア連邦ノヴォシビルスク市内のアカデムゴロドクで開催されました。センターからは2-3月に連絡事務所に駐在していた私が参加しました。昨年の夏から徐々に準備を進めていたのですが、せっかくなのでノヴォシビルスクの専門家ばかりでなく別の都市からも研究者を招こうと、ウラル地方の研究者にも声をかけました。トムスクというシベリアでは歴史の古い町から一人、ウラルのペルミ（列車で24時間以上）から二人の研究者がはるばるかけつけてくれました。歴史研究所のパプコフ氏に熱心に協力していただいたおかげでシンポジウムは成功裡に終了しました。初日は午前10時から夕方の6時まで、二日目もお昼過ぎまで合計約20人が発表しそれぞれについて活発な質疑応答が行われました。

スターリン（1879-1953）の死から来年で半世紀たつことになりますが、ペレストロイカ以後ソ連が崩壊しそれまで歴史家に閉ざされていた史料館への道が開かれてほぼ10年経ち、フルシチョフ時代に中途半端に終わった「スターリン批判」を含め一次史料に基づいた歴史研究が深化しつつあります。今回のシンポジウムは特にウラル、シベリア地方におけるスターリン体制の特徴について様々なテーマで報告がなされました。

発表者と簡略化したテーマ（年代や副題は省略）を以下に列挙することで、内容の紹介にかえたいと思います。「シベリアにおける行政的・地域的構成」（キーシキン）、「インテリゲンツィアとテロル」（セリャーノヴァ）、「1929年穀物調達ウラル・シベリア方式」（デミードフ）、「西シベリアの政治部システムにおけるOGPU・NKVD（*ともに治安機関）」（テプリャーコフ）、「NKVDと西シベリアにおける民族政策」（ウイマーノフ）、「極東におけるソ連の動員政策」（寺山）、「シベリアへの農民の強制移住」（クラシーニコフ）、「シベリアにおける人口政策」（イスーポフ）、

「シベリア農村における租税システム」（イリイヌイフ）、「シベリアにおける外国人捕虜」（ドルゴリューク、ブキン）、「スターリンによるシベリアにおける軍需産業構築政策」（パーヴロヴァ）、「ウラル・クズネツクコンビナート建設に関する社会問題」（イサーエフ）、「民族政策の道具としてのシベリアへの民族強制移住」（シャット）、「スターリンのシベリア視察」（ボズナンスキー）、「シベリアと日本」（マルィシェヴァ）、「ソ連における強制労働の効率」（スースロフ）、「ノヴォシビルスクにおける軍産複合体センターの構築」（サヴィツキー）、「大祖国戦争時のシベリアにおける弾圧政策」（パプコフ）、以上です。ウラル、シベリアなどの地方の歴史家にとってモスクワ、ペテルブルグなど中央の歴史家が看過しがちな地方の史料を使える利点がありますが、重要な史料が保管されている中央から遠いことは、現在のような経済状況においては大きなハンディです。中央集権的な体制を分析する場合は、なおさら中央の史料の閲覧は極めて重要な課題になりますが、すべてのシベリアの研究者がそのような機会を得ているわけではありません。より広範な史料にアクセスできるチャンスができるだけ多くの研究者に訪れることを期待しています。

なお、当日の発表者、及びシンポジウムには参加できなかったけれども論文の発表を求める研究者による論文集（シンポジウムと同名）が近くノヴォシビルスクで出版されます。

「シビルスキー・フロノグラフ」という出版社からですが、そのヤノヴィチ社長と筆者は、1997年6月にセンターがノヴォシビルスクに代表団を派遣した際に知り合いになり、『東北アジア アラカルト』第二号「シベリアの過去と未来」（拙訳）に、「学術出版とシベリア・クロノグラフについて」（5-16頁）という文章を寄稿していただいたことがあります。未熟な民主化の流れの中で、経済的な危機を克服しながら着実に発展する学術系出版社（特に歴史関係）の中に彼の出版社を入れてもいいのではないかと思います。ヤノヴィチ氏は「ペレストロイカの頭脳」と言われ、現在は学術活動に専念しているアカデミー会員A・ヤコヴレフ氏との関係を強化し、同氏の企画する一連の文書集の出版に一役買っています。設立されては消えていく出版社が多かった中で、モスクワから遠いノヴォシビルスクで見事に生き残り、さらに活動を続けている彼らの活動にエールを送りたいと思います。

（寺山恭輔）



講演会

「朝鮮革命論の功罪－自主から‘主体’そして対話不能へ(北朝鮮の50年)－」について

平成14年2月21日、東北アジア研究センター大会議室において、共同研究「古ツングースの生産文化に関する自然科学的再検証」第14回研究集会として標記の講演会が開催された。

講師の東京大学名誉教授小川晴久氏は、現在二松学舎大学特任教授として研究教育に携わり、また講演・著述活動を繰り広げる。物心二元論の現代文明研究者としても著名ではあるが、このたびはもう少し同氏のご研究の基盤的部分でお話を願いました。

同氏は、朱子学研究を突破口としながらも、朝鮮思想とりわけ洪大容らの李朝実学思想の追究の過程から、民族のそうした伝統的エトスとの脈絡の中で北朝鮮(朝鮮民主主義人民共和国)建国の理念・思想の検証へと研究を発展させて来られた。北朝鮮に対しては多くの人々により政治・経済・軍事・文化等さまざまな視角から観察がなされているが、その世界を支配するパラダイム及びそこに由った行政的・社会的現象に対する微視的な発言は余人には見られないものがある。まさしく、北朝鮮50年史を支えた屋台骨＝根幹思想を真向から捕らえて解き明かし、同時に問題点を抉り出すもので、次のようなお話であった。

人民共和国成立後において打ち出された朝鮮革命論の評価に重きが置かれた。思想活動において教条主義と形式主義を排除し、朝鮮民族としての主体を確立していくひとつの拠りどころとして歴史・地理・風俗等の民族文化の研究の必要性が説かれた。いわゆる共産主義はここではまず民族主義に依って立ち、マルクスレーニン主義は行動の指針であると主張されたのである。朝鮮革命の健全な流れが築き上げられていったといえよう。その学問的成果の一つが『朝鮮哲学史』(鄭鎮石・鄭聖哲・金昌元共著、1960年平壤刊、1962年日訳)である。17～19世紀



会場風景

の新しい学問が実学思潮と規定され、とても高い評価を受けていた。講演者はこの本を通して朝鮮実学とその旗手洪大容を知り、1978年に一年ソウルに留学した。

ところが、60年代後半になって「チュチェ思想」という名称のもとにそれは奇形な道を辿る。すなわち、金日成神格化に基づく金日成独裁主義へと連なる。そこでは、民族文化は格下げされて批判的継承が唱えられた。しかもマルクスレーニン主義からも完全に遊離し、論理構造は個人崇拜にシフトしていく。もう一つの朝鮮革命論が首を擡げ、金日成主義を支える理論的根拠となっていく。この段階ではすでに集団主義的国家論のもと王朝化が始まり、人権意識は完全に消滅してしまった。あらゆる対話が不能となる。科学でもない真実からかけ離れた体系が構築されていった。

(成澤 勝)

客員教授紹介

鄭永振・(中国)延辺大学渤海史研究所教授

鄭客員教授は文化革命後の混乱中国ではあったが、しっかりと学術に志し、名門吉林大学で考古学を修め、当該地域の多くの発掘を手がけてきた。延辺朝鮮族自治州に研究の拠点を置き、同自治州文化庁を経て、長く延辺博物館長も勤めた。いまや、渤海・遼・金代の考古学、とりわけ墓制研究では斯界の第一人者である。まさに現場を熟知する考古学者といえよう。

本研究センターの文理融合型共同研究課題に「古ツングースの生産文化に関する自然科学的再検証」があり、成果をまとめる段階に入っている。このプロジェクトの中でもツングースによる王国‘渤海’は主要な研究対象であり、

中でも大きなテーマとして、特にその消滅と10世紀の長白山(白頭山)巨大噴火との関連は火山学方面から大きな関心が寄せられてきた。そこで本研究センターでは



3月22日研究集会(7頁参照)にて報告する
鄭客員教授

その文理共同型組織という特徴を活かし、地質学・火山学・生物生態学・歴史学・伝承学・言語学といった方面に加え、土壌学・形質人類学、さらには考古学などの専門家まで糾合して、組織的学際的に進めてきた。

史家たちは、もちろん諸方面の文献を精査しつつ、渤海故地の空地化は遼の政策で、渤海遺民は強制的に移住させられたとなし、定説化している。しかしそうした‘定説’は必ずしも当たらない可能性も提起されてきた。即ち自然災害によって当該地域が居住不能・生活不能となっていくのではないかという見方である。とりわけ、本件共同研究の代表者である成澤勝本研究センター教授は“渤海国滅亡後も一部住民はその故地に残り、生産・生活を続けていた。たとえば、渤海の顕州(現在の延辺地域に含まれる)住民は、遼の地に新設された‘顕州’に移住させられたがまた故地顕州に残ったものもあり、それらが10世紀半ばに自ら進んで新設顕州への移住及び生業を求めてきた。時の遼世宗はこれを迎え入れた”とする『遼史』の記事に注目し、故地顕州には強制移住による退去以外にも何らかの理由で住み得なくなった人々がいたことを確認している。

鄭客員教授の着任によって、以上のような新たに浮き彫りにされてきた問題点に対して、より実証的にアプローチしていくことが可能になってくると考えられる。

(上野稔弘)

最近の共同研究会・講演会から

◆2002年2月5日(火)の14:30より、共同研究「北アジアの環境・文化・歴史に関する総合的研究」の第2回研究会が開かれ、次のような報告が行われた。

- ・ Popova, Liudmila V.
(サンクトペテルブルグ大学経済学部講師)
「東北アジア経済圏における大変動：1990年代の変化と将来への展望」
- ・ Dendev Badarch
(東北アジア研究センター客員教授・モンゴル科学技術大学学長)
「モンゴルにおける高等教育について」
- ・ Janchiv Galbadrakh
(東北大学大学院教育学研究科博士課程後期・新モンゴル高等学校校長)
「モンゴルにおける中等教育の改革について—高等学校を中心に—」

◆2月14日(木)の16:00より、共同研究「ポスト社会主義圏における民族・地域社会の構造変動に関する人類学的研究」の第3回研究会として次の講演が行われた。

- ・ Vanda Ignat'eva (Institute of Humanitarian Research, Yakutsk, Russia)
"The Theoretical and the Methodological Aspects of the Contemporary Ethnological Researches of Siberian Peoples: An Example of the Republic Sakha (Yakutia)"

◆2月16日(土)13:00より、共同研究「白頭山10世紀巨大噴火とその歴史効果」の第2回公開シンポジウムが行われた。以下のような報告があり、その後総合討論を行った。

- 研究報告1「白頭山10世紀巨大噴火の概要」
 - ・ 奥野充(福岡大学理学部)
「B-Tm火山灰の年代学的研究—炭素14年代測定による高精度年代決定の試み—」
 - ・ 宮本毅(東北アジア研究センター)
「白頭山10世紀噴火の噴火時系列と火山伝承」
 - ・ 中川光弘(北海道大学大学院理学研究科)
「噴出物の解析から見た白頭山10世紀噴火とB-Tm火山灰」
- 研究報告2「白頭山10世紀噴火の人類・自然への影響」
 - ・ 菅野均志(東北大学大学院農学研究科)
「長白山周辺地域の火山砕屑物由来土壌の特質」
 - ・ 成澤勝・上野稔弘(東北アジア研究センター)
「白頭山噴火時期の判定に向けた一視点—渤海流民生態の分析から見てくるもの—」
 - ・ 鶴園裕(金沢大学経済学部)
「白頭山の名称由来について」

◆2月23日(土)の14:00より、次のとおり共同研究「東北アジアにおける民族の跨境生態史の研究」の第3回研究会があった。

1. 報告 鈴木岩弓(東北大学文学研究科教授)
「ウズベキスタンにおける高麗人墓地調査から」
2. 平成14年度ウズベキスタン現地調査計画の策定に関する討議

◆3月13日(水)の15:00より、公開シンポジウム「火山爆発ダイナミクス理解のための野外爆発実験」が行われ、次のような報告があった。

- ・ 谷口宏充(東北アジア研究センター)
「野外爆発実験—その意義と展望—」
- ・ 中島睦(応用地質株式会社東北支社技術部)

「発破実験で使用する火薬類について」

- ・ 後藤章夫(東北アジア研究センター)
「野外爆発実験における爆風圧・クレーター径・爆煙形状と薬量・発破深度の関係」
- ・ 横尾亮彦(東北大学大学院理学研究科)
「伊豆大島1986年噴火において発生した光環現象」
- ・ 西村太志(東北大学大学院理学研究科)
「火山爆発の数値シミュレーション」
- ・ 市原美恵(東北大学流体科学研究所)
「高速度ビデオと圧力センサーによる水中爆発同時観測実験：火山爆発の観測への適用の意義について」
- ・ 大島弘光・青山裕(北海道大学大学院理学研究科)
「空振観測の現状」
- ・ 山本裕朗(東北大学大学院理学研究科)
「水中爆発実験における水中衝撃波の計測」

報告が終了したあと林信太郎氏(秋田大学教育文化学部)のコメントがあり、その後全体での討論を行った。

◆3月18日(月)18時15分より仙台市青葉区中央1丁目のネ！ットUにて国際協力銀行(JBIC)・国際協力事業団(JICA)東北支部・東北大学東北アジア研究センター共催、東北経済連合会・国際開発ジャーナル社後援の講演会「国際協力と産業開発を考える集い—日本と国際社会の健全な発展のために—」が行われた。この講演会は良好な国際関係を維持し、平和な共存共栄の道を常に模索して行くため、日本の経済協力の実施機関である国際協力銀行(前海外経済協力基金と日本輸出入銀行の合併組織)の果たしている役割と機能、国際協力事業団よりその活動と機能について語り合ったもので、講演の内容と講師は次の通り。

- 司会 東北大学大学院国際文化研究科客員教授 戸田 弘元(産業開発協力論)
- ・ 地域からみた日本の経済協力：東北経済連合会常務理事・事務局長 大堀 英俊
 - ・ 国際協力事業団(JICA)の機能と活動役割について 国際協力事業団鉱工業開発協力部長 中島 行男
 - ・ 国際協力銀行(JBIC)の機能と活動役割について 国際協力銀行本店プロジェクト開発部次長 松澤 猛男
 - ・ 地域と大学の関係 東北大学東北アジア研究センター長・教授 山田 勝芳
- 質疑 フロア参加者全員

◆3月22日(金)の15:00より共同研究「古ツングースの生産文化に関する自然科学的再検証」の第15回研究会があった。鄭永振・東北アジア研究センター客員教授(延辺大学渤海史研究所長)が研究報告「東丹国期から遼初期にかけての渤海中京地域—白頭山噴火の歴史作用を睨みつつ—」を行い、その後参加者による討論があった。

◆3月27日(水)15:30より共同研究「東北アジアにおける民族移動と文化の変遷(チュルク班)」の第5回研究会が行われ、次の報告があった。

- ・ 浅村卓生(東北大学大学院国際文化研究科修士課程)
「ウズベキスタンにおける劇場の史的展開」

(柳田賢二)

センター動向

■ 寄附研究部門

昨年1月1日より次の寄附研究部門が設置されました。

【環境技術移転(NKK)寄附研究部門】

- 渡邊 之(ワタナベ、イタル)教授：環境技術(昨年1月着任)
- 鹿叶(スエー)助手：環境政策(昨年4月着任)

■ 現在の客員研究者

本年4月～6月の東北アジア研究センターの客員研究者をご紹介します。

<客員教授>

【国内から】

- 和田春樹(ワダ、ハルキ)教授：東京大学名誉教授・ロシア国立人文大学名誉博士、開発と社会変容の研究
- 江夏由樹(エナツ、ヨシキ)教授：一橋大学大学院経済学研究科教授、東アジア・北アジア交流論
- 田村正行(タムラ、マサユキ)教授：国立環境研究所上席研究官、ノアデータを利用したシベリアの環境解析

【海外から】

- OKRUGIN, Victor M.(オクルギン、ビクトル M)教授：ロシア、ロシア科学アカデミー・極東支部火山学研究所主任研究員、東北アジア地域の多金属鉱床の生成環境に関する研究

- 鄭永振(テイ、エイシン)教授：中国、延辺大学教授、渤海史研究所長、ツングース系諸族の興亡とその文明—渤海を中心に—

<客員研究員>

- 呼日勒巴特爾(フレルバートル)研究員：中国、日本学術振興会外国人特別研究員、モンゴル語音韻史の研究
- BORONOEVA, Darima Tsybikovna (ボロノエヴァ、ダリマ・ツィビコヴァ)研究員、ロシア、ロシア国立ブリヤート大学文化学部主任教官、日本におけるモンゴル系民族コミュニティに関する研究
- 曾 昭賢(ツェン・ツォファ)研究員、中国、吉林大学助教授、地下計測の研究
- 方 広有(ファン・グアンヨウ)研究員、中国、中国伝播文化研究所教授、高精度地中レーダの開発と人道的地雷検知への応用に関する研究

(塩谷昌史)

東北アジア学術交流懇話会

会員の広場

トラスト株式会社社長 佐藤 金市

'99年9月下旬の懇話会企画・第2回ノボシビルスク訪問団に参加し、国際見本市シベリアンフェア（シンポジウムならびに博覧会：うしとら No.3 参照）の展示会に、自社製品を出展する機会を得ました。ハイレベルの日本製中古IT機器に関する、ロシアでのビジネスの可能性を見極めようとしたものです。

成田からモスクワ、さらにノボシビルスクまでの15時間の視界の大半は、どこまでも広がるツンドラ・冷たい氷の世界で、ビジネスなどとは無関係のとても大きく巨大で掴まえ處のない国という印象で不安でした。しかし、一旦地上に降り立って見ますと、かつてシベリア鉄道のオビ川鉄橋工事に共に開発された'新しいシベリアの町'ノボシビルスク市は人口160万のロシア第3番目の大都市であり、オペラ・バレエ劇場、サーカス館、各種博物館など立派な建築物が立ち並び、さらにアカデミータウン研究所群の威容を見るにおよんで、強烈なカルチャーショックを受けると共に、市場の物陰に散在するホームレスにロシアの問題点を見たように思いました。

心配していた展示会の方も、国際見本市とはいうものの今回は外国からの出展は弊社だけでしたので、ビジネス上の来客に加え新聞社やテレビ局の取材も次々と受けざるを得ず、朝から大混雑のブースとうれしい噂を獲得しました。目まぐるしく過ぎた4日間でしたが、その間ロシア科学アカデミー諸研究所の見学とか、当時のノボシビルスク市長タラコンスキー氏（翌年1月州知事）による歓迎パーティーなどにも参加しました。



写真1. '00.7 夏のオビ湖遊覧船上
ノボシビルスク支社立上げ直後 現地従業員等と

ついで昨日の出来事の様展示会への参加でしたが、

すぐさま翌年に現

お互いの交流拡大を目的として、会員皆様の近況・ご意見などを発信していただくスペース(不定期)です。

今回は本会行事でノボシビルスク市を訪れ、翌年に現地に関連会社を設立し、現在までにロシア国内に4社を立ち上げられ、さらに新たに合併工場を設立されつつある、佐藤金市 会員殿の登場です。

地支社を設立し（写真1:オビ湖は、アカデミータウンの近くにあるオビ川を一部せき止め出来た人工湖）、3年半が経った現在ではロシア国内に関連会社4社を立ち上げ、これら全て順調に推移しております。



写真2. '01.7 工場設立契約締結記念撮影
協力会社社長、ロシア社社長等と

ところで、きょう現在いちばん力を注いでいる大仕事は、ノボシビルスクにチップマウンター日露合弁企業の工場を設立しつつある事です（写真2）。これまでとは違って工場の設立なので、資金・設備的な課題、営業・物資輸送等の課題が横たわっており、なかなか一筋縄では解決せず日ごと頭髪が薄くなってきている思いです。

どなたか関心お持ちの方のお知恵を拝借致したくご一報をお待ちしております。

これらのビジネスを始めてから、ロシア国内東西を仕事中心に幾度となく見て回りましたが（写真3）、おかげでロシア人の思考回路について少しは分かるようになった気がしております。



写真3. '01.7 ウラジオストクにて
ロシア東部調査旅行時ノボシビルスク支社幹部と

今後ともノボシビルスク地域を中心に、難題を乗り越えて少しでも国際親善に役に立つ

ような事業を興して行こうと思っております。



私たち東北アジア学術交流懇話会が特に推進してきたシベリア地域との学術交流を基盤にして、すでに民間レベルさらには企業レベルでの交流も着実に実を結びつつあり、いよいよ本懇話会の役割が重要になってきたように思えます。アイデアと情報はなかなか「個」の段階では揃いませんが、交流を通じてそれらはうまく融合していくとも言えましょう。

(成澤 勝)

《うしとら》（東北アジア学術交流懇話会ニューズレター）第13号 2002年5月27日発行

発行 東北アジア学術交流懇話会 編集 東北アジア学術交流懇話会ニューズレター編集委員会

〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 東北大学東北アジア研究センター 気付

PHONE 022-217-7580 FAX 022-217-6010

http://www.cneas.tohoku.ac.jp/gon2/ E-mail :iwayama@cneas.tohoku.ac.jp